

# 時化と鮮魚介類の需要（11）

今回は、時化を認識しているのであれば、予め陸の「プール」に「需要」を賄える分のみ移動させ、その間の「需要」と「供給」のミスマッチを防止する。と結んだが、実際の「プール」は、一部の卸（小売）業者において細々と営まれている（よく見かける水槽の場面）し、「留置く定置網」は、「需要」と「供給」のミスマッチを防止する意図は全くない「時化や休漁日」の理由で、結果的にそうなっている。また、一部の漁業者も他の漁法で漁獲したものの一部を出荷せずに、僅かに「留置く定置網」の役割（機能）を果たしているが「プール」にしても「留置く定置網」にしても、あくまで自己防衛の範囲を超えるものではなく、鮮魚介類全体の「需要」と「供給」のマッチングや「流通の円滑化」を意識したもではない「自己利益の確保」の範疇に過ぎない。

◇畜養について 「大人の食育書」コラム③より抜粋・再掲

～そこで（流通）バッファが必要となる。＝活で在庫を持つ＝蓄養である。蓄養は

①流通バッファ（漁獲のバラツキと需要・消費のバラツキの緩衝）

②育成（幼魚を成魚に育てる。養殖と同義）

③付加価値を与える（太らせる。脂のせる。休ませる。洗浄する等）

に細分化（分類）され、それらの複合もあり得ると考えられる。その最も簡便な実現方法は「2ピン法」である。～と述べた。「畜養」も「バッファ」の形態の一つである。

また、計画的な「養殖」は「バッファ」の形態の一つとは言えないのかもしれないが、「需要」と「供給」をマッチさせる「有効」な手段であることに相違ないし、対象とすべき魚種も多い。少しの工夫で、「漁獲」を凌駕する可能性も秘めている魚種もある。

真の需要者（召し上がる）の方々を満たす供給のあり方や流通の円滑化を実現するため県・自治体と漁連および漁業者の「意識改革」が強く求められる。水産庁（国）は、HP上「国産水産物流通促進事業」の中で「川上（産地）から川下（消費地）までの流通過程の各段階において、消費者の水産物ニーズに十分に答えきれていないことが課題となっております。」と指摘している。要するに、消費者は、今時化なのかどうかは意識していない（関心することはない）し、今何が旬なのか、何が漁獲されているのか、何が出荷可能なのか知る術や動機を持ち合わせないから。すなわち「需要」を創り出したり、掘り起こしたりすることなく一方的に「押し売り」し「魚価の高騰」のみに腐心している状況は、一刻も早く「矯正」しなければならないとの結論に必ず至る。したがって、消費者～生産者（漁業者）までの「鮮魚介類の全体最適」を目指すために、実行するのは、1個人や1業者ではなく、国・県・自治体と漁連にその「バッファ」の創設が強く求められる。